

私にとっての野沢スキー合宿

4期 佐藤 秀紀

私は2008年67歳の時から野沢温泉スキー合宿に参加させてもらった。昨年は京都マラソンと重なり、やむなく欠席となったが9回の参加である。最初に参加した時の感想を「吹雪のすごさ、総湯の素朴さ、スキーの楽しさ、仲間の集いの楽しさを味わう。よきかな」と日記に記している。確か、家が近くの舟田さんのお誘いか、お願いして連れて行っていただいたかであろう。最初は一寸気後れしたような気がする。何しろほとんどのメンバーは知らず、知っているのは田村さん、舟田さんぐらいであろうから。しかし、久しぶりに昔若いころに行っていた野沢をまた滑りたいという気持ちが強かったのである。ちょうど、この年は地元スキー場へ一緒に出かける古くからのスキー仲間とカービングスキーを遅ればせながら新調した年でもあった。また、その友人とニセコへ初めて滑りに行くツアーに参加予約をした頃でもあったので、その足慣らしも兼ねての思いもあったのかもしれない。その結果が前述の日記の感想である。ここで、初めはそれほど予期していなかったワングル仲間との楽しい出会いが思いがけずあったのである。

私にとっての野沢スキー合宿は中心の異なる二つの輪の重なりに位置する。一つの輪は純粋にスキーを楽しむこと、もう一つの輪はワングルOBとして「ワングル精神」ともいうべき心意気を共有して、交流を楽しむこと、である。そして、それらの輪の重なる部分の相乗効果のお蔭で両方ともが大いに深まり楽しみも倍加することができたのである。まさしく「良き哉！」である。

スキーを始めたのは30代も終わり頃、1980年前後ぐらい。学生の卒研打ち上げでスキー場に行くようになった頃からである。ワングル時代には1回だけ「山の坊」という大糸沿線の小さなスキー場（といっても斜面に動くロープが一本あり、それを握って登る）で合宿をやったのが思い出で、その後はやっていなかった。スキーは金がかかるもの、であったのである。40代頃はスキーブームが起こった時で石川県内にもスキー場



<「山の坊」スキー場での合宿風景(1959.12)>

が次々とでき、休日には朝早くから夕方遅くまで良く滑りに行っていた。卒研の打ち上げには野沢や志賀高原へ二つの研究室合同でバスを貸し切ってでかけたことも度々あった。スキーの魅力は雄大な景色を眺めながら広々とした斜面をスピードを出して滑ることにある。初めの段階でしっかり基礎を習わず自己流でやってしまった後悔はあるが、自然の中で身体を動かすのが好きな自分には合っているスポーツであろう。

私が定年で辞めた2006年頃には学生たちはボードであったが、それも次第にやらない者もでてくるようになり、スキーブームは下降気味になって行った。カービングスキーが出てきて年寄り向きではないかとの話があったが、もう新しいスキーでやることもないだろう、と思っていたところ、古くからの仲間から買ってみたいかと持ちかけられ、一緒に買った。なんだかこのままスキーを終わるのも惜しい気もあったのである。それで、買った以上は、というのでニセコに出かけることになり、また野沢も魅力的に思えた。すなわち、老いの中にも血を沸かす何かがあったのであり、タイミングがよかったともいえる。

一方、ワングルの方は、私が入学した昭和34年(1959年)、前年にできたばかりのクラブであった。自然の中で自由に身体を動かすのが好きという程度で入ったかと思う。主に1年先輩の方々とともに創設期の若々しい自由なワングルの活動を体験した。入学当初の5月連休の合宿は能登半島一周3泊4日のテントを担いで歩いた旅であった。当時はまだマイカーなどないのんびり



<夏の合宿・能登半島一周(1959.5)>

りした時代で砂利道を、曾々木、祿剛崎、小木と泊り、海を眺めて唄を歌いながら歩いた。自然と触れ合いながら精神と肉体を鍛えよう、というような気風があった。一番最初の部室は皆がミカン箱などを持ち寄ってつくった掘立小屋風であった。何かをゼロからみんなで作り上げる喜びに浸っていたのである。喧々諤々の議論もその中でよくやった。専門課程に進む頃には忙しいこともあって自然退部のような形になってしまったが、ワングルに入ったことは学生時代の何ものにも代えがたい宝物であり、お蔭で山歩きが好きになり、花が好きになり、一生の貴重な財産をもらったと深く感謝している。先輩との交流も深く、今でも4期以上の仲間で年2回ほど2泊3日の合宿旅行を毎年続けている。



<57年振りに曾々木を訪れた昔のワングラー2016.10>

そのように、ふりかえると若い時代に情熱を傾けた自分にとって二つの貴重な輪が重なり合うのが野沢スキー合宿である。しかし、前にも述べたように、初めて参加した時にはほとんど知らない人達のなかで楽しくやって行けるであろうかの思いが大きかった。まして、クラブOBといっても途中退学みたいなものであり、OB面するほど

ではないのであるから。しかし、そんな思いは杞憂であった。皆さんがこだわりなく受け入れて下さり、気持ちよく楽しく最初の合宿を過ごすことができた。メンバーの中に知人として、田村さん、舟田さん以外に、大学の学科卒業生である、保田さん、森川さんがおられたことも懐かしく思えた。この時であったかと思うが、森川さんが外湯に入りに行くのだといって裸足サンダル履きで雪の中を出かけるのに驚いた。しかし、確かに帰には体がポカポカして気持ちいいぐらいでタオルが寒さで棒のようになったが、なぜか若々しい愉快な気持ちになったのを覚えている。ワングル精神が甦った気分であった。

夜の部屋でのイベントもなかなか面白かった。舟田さんや増泉さんが和服で現われ、お茶を点てられたり、琵琶の演奏をされたのには正直驚かされた。普通のスキー旅行にはない、「文化の香り」を感じた。これもまたワングル気風の一つであろう。伝統は生きていたのである。



<野沢夜の宴(2008.2)>

この他、個人の1年間のイベント紹介もパワーポイントを使って行われ、これも大いに興味深いものがあつた。

そんなこんなで、一夜にして多くの人達と気持ちよく楽しく過ごすことができた。OBであることをしみじみ有りがたいと思った。

その後、私も夜のイベントで何度か話をさせてもらった。

「白山神駟：美濃・加賀禅定道を歩く」(2010)

「ゴビ砂漠緑化活動」(2010)

「名古屋・金沢ウルトラマラソン完走」(2011)

「白山100回登山」(2013)

こんな話をきいてもらうことは嬉しいことで、交流・知識を深める良い機会でもある。

肝心のゲレンデの魅力はどうか。私はあまり他のゲレンデに詳しくはないのだが、野沢は毛無山という一つのピークを持つ山でまとまっておりますながら、変化に富んだ尾根がいくつもあり、コースが多様で多く、大変楽しめるスキー場だと思う。また、妙高などの眺望や、ダケカンバなど樹氷の眺めも素晴らしい。そして、雪質も時にもよるが一般に大変よい。私はヤマビコ辺りで滑るのが好きだが、最後にスカイラインを下りてきて、柄沢ゲレンデの広々とした緩斜面をゆったり滑るのも大好きである。ビールでも飲んでほろ酔い加減で滑るのはたまらない。

「右左ゆったり滑る緩斜面鳥の気持ちになりて楽しむ」(秀紀)



旅館の場所・雰囲気・料理・サービスも大変よい。疲れて帰ってきて薪ストーブのほっこりした暖かさに身を任せながら飲む甘酒は最高である。去年2016年はちょうど京都マラソンと重なり、欠席した。しかし、別の日に後期高齢者スキー仲間三人で「ふるさと」に泊まって野沢スキーを楽しんだ。大変好評で、今年2017年には合宿と合わせて他の二人が同宿して楽しませてもらった。

この10年程参加させてもらったお陰で多くの私より若いOBメンバーの人達と親しく知り合いになったことも大変嬉しいことである。ここに参加しなければ生涯知らなかった人達である。お陰様で、5年毎のワングルOB会に参加しても多くの若い知り合いがいるのは嬉しい。ワングルOBであることの意識が広がったような気がする。野沢メンバーのつながりで、赤倉のスキー合宿や白山の南竜合宿にも参加させてもらった。

もう一つ、人との繋がりであらたな思いを呼び

覚ましてもらったことがある。柴田勝之さん(8期)である。彼は私の学科の卒業生である。私の研究室とは別の研究室の学生だったが階が同じで、研究室学生らとともによく飲んだり話をしたりしており、良く覚えている。今回の記録から彼の死や動画をみて大変懐かしく、しかし残念な思いをした。一緒に滑ることができたらどんなに良かったらと思いを馳せた。もう一人、北口修さん(9期)である。彼は私の研究室の卒業生である(名前は長田と変わったが)。彼とはあるとき病院で偶然久しぶりで出会い、重篤な病にかかっていることを知った。ワングル名簿から彼がワングルだったことを知り、同期で野沢メンバーで私が良く知った人達がいることを告げると大変懐かしがっていた。私が良く知っている彼と同期の野沢メンバーを通して、あらためて彼のワングル時代に思いを馳せることができた。いずれも野沢スキーがとりもつ人の繋がりの妙というものであろうか。



このように、野沢スキー合宿は私にとって、スキーをやるうえでも、ワングルOBとしても素晴らしい交流の場であり、大変貴重な財産であると思っている。ワングルに入ったことで現役とOBと二度も楽しませてもらっている。まだしばらくは楽しませてもらいたいと思っている。4年後には傘寿(80才)を迎えるが、ハワイの二度目のホノルルマラソンと野沢スキーはなんとか達成したいと今から楽しみにしている次第である。

どうか今後ともこの合宿が楽しい会として継続してくれることを願っている。

最後に、これまでの運営幹事、特に私が参加してから何時も幹事世話役としてご尽力いただいている青柳さんに、深く感謝を捧げたい。ありがとうございます。